

## 「小数」

### 1 提案の主張点

新春研修会で提案された善通寺市立中央小学校の森先生の実践を参考に「問い心」を活用した。数学的に考える力は、繰り返したり、模倣したりすることによって鍛えられる。「問い心」を考えたり、友達の「問い心」を聞いたりする経験を多くさせ、数学的な考え方の基礎を高めていきたい。

「問い心」を活用することで、「なぜ」「○○だったら」と考えたり、1つの課題に対していろいろな視点からアプローチしたりする態度を養うことができる。また、答えへの過程を自分で確かめたり、友達と学び合ったりすることができる。

### 2 提案に対する意見

**質問：**0.6×3のとき、『0.』をのけて計算して後でつける子への指導をどうされたか。

10倍して10で割るとき、量がどうして保存されるのか、その一般化をどうされたか。

**答え：**図をかいて視覚的に捉えさせたり、何を数えたり、計算したりしているのかを問い返したりした。10倍して10で割ると答えが一緒になるまでしかおさえていない。

**意見：**「問い心」活用すると、子どもから出た「なぜ」というところを取り上げて、それをみんなでゴールまでつないでいけることができるので、活用してみたい。0.をのけた処理の仕方はよく出てくる。「勝手につけてもいいの。勝手にのけてもいいの。なんかあるよね。」と投げかけ、みんなで見つけていくことが大事。

**意見：**とにかくドリルをやろうという流れが出ている中で、「問い心」を使って思考力や意欲を育てようとしているのはよいと思う。「学ぶ力を育てる」（岩波新書）では、葉っぱを知識・理解、幹を思考力、根を意欲、太陽を教師・保護者に例え、学力を木全体と捉えている。「問い心」は、根や幹を育てるもので、素晴らしいと思う。終末のところでも、「だったら・・・」

「もしも・・・」と考えさえ、もっと生かす場面があればよい。

### 3 御指導

学力向上に向けて、友達と学び合うところに中心を据えて実践しているのがよい。「問い心」では、掲示してあるキーワードを基に考えていけるので、子どもに分かりやすい。算数では、現実離れしている内容が多いので、思考という観点をもって指導にあたる必要がある。習ったことを思い出して新しいことを知る、そこに思考力が働く。日常生活の中では、思考力を測定できないが、算数では要素が限られるので測定できる。0.6×3で、『0.』をのける理由を言えない子が多い。経験しても説明できない。それは、したことを整理できていないから表現できない。どう発表したらよいか分からない子へは、何が分からないのか言ってみたり、書いてみたりするのが第一歩である。「問い心」は非常に分かりやすい手法なので、こういう「問い心」を付け加えていくと、分からない子への手立てになる。既習事項が使えているかチェックし、それを積み重ねていくことが思考力を育てる。

中学校でも、負の数、√など、数が広がると比較的よく取り組む。その必要性やよさを子どもたちに実感させたいとき、「問い心」が役立つのではないかと思う。最近、ドリルを重視し、定着率が上がっている。しかし、意味理解が不十分である。もっと意味理解に時間をかけるようにしたい。小学校の算数指導で指導上の改善点（国立教育政策研究所教育課程研究センター）として出されていることの1つ目は、学習したことを日常事象と結びつけたり、生かしたりできるようにすること、2つ目は、考え方や解決の方法を別の場面や問題で活用できるようにすること、3つ目は、自分の考えなどを筋道立てて適切に表現できるようにすることである。提案の中にあっただように○○だから△△になるという説明の仕方を身に付けることが大切である。言葉や数、式を読み取ることと並んで自分を表現することが重要である。「問い心」の実践の継続と成果を期待する。